Initiatives of Change
一人ひとりのチェンジで信頼を築く

IC ニュース NEWS

Vol.38

公益社団法人　国際IC日本協会

発行年月日 2023年7月15日
発行所 公益社団法人 国際IC日本協会
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-28-20
パレ・エテルネル206号
TEL：03-6273-1428 FAX 03-6273-1429
E-Mail：info@iofc.jp HP：http://iofc.jp
<International IofC>HP：www.iofc.orc

頒価 1部 200円

MRA/ICと原爆記念碑碑文　会長　藤田　幸久

【MRA/IC の世界歴訪が原爆記念碑碑文の契機】

4月21日に岸田文雄総理に広島サミットに関する二つの提案を行いました。国際 IC 推進議員連盟の中曽根弘文会長と森山浩行事務局長の計らいでした。

第一は、1950 年に当時の広島市長、浜井信三氏が MRA/IC 使節の一員として現在の G7 諸国を歴訪したことが「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませぬから」という原爆記念碑の碑文作成につながった経緯を G7 首脳に伝えることを提案しました。浜井市長がスイスの MRA/IC 国際会議で独仏の和解の現場を見、米国の議会やアーリントンの無名戦士の墓地などを訪問し、ローマ法王、ドイツ・アデナウアー首相、フランス・シューマン外相、リー国連事務総長他と会談したことが契機となったという歴史です。

ロンドン市長に広島の十字架を贈呈する浜井市長
後方が相馬雪香元国際IC日本協会会長

原爆使用は、投下した国と被爆国とを含めた「全人類の過ちとして、繰り返してはならない」という浜井市長の想いを理解して頂きたいとの思いです。敗戦国と戦勝国の両方への訪問で得たこの意味は、今日的には、核を使用させないことが「核保有国」と「非保有国」の共同責任であることです。平和資料館で米国バイデン大統領は以下のように記帳しました「この資料館で語られる物語が、平和な未来を築くことへの私たち全員の義務を思い出させてくれますように。世界から核兵器を最終的に、そして、永久になくせる日に向けて、共に進んでいきましょう」。岸田総理が首脳達にどう説明したかはわかりませんが、この記帳は碑文作成の物語を反映しているように思えました。

【「過ち」の英訳を evil から mistake に】

第二に「過ちは繰り返しませぬから」という碑文の英訳です。"Let all the souls here rest in peace for we shall not repeat the evil" と「過ち」が evil と訳されていますが、mistake が原文に近いことを首脳達に伝える提案をしました。その理由は、浜井市長と親しかった片岡義信国鉄理事の長女、高橋久子さん所蔵の浜井市長のドイツの友人の本に、市長が刻んだ言葉が "We shall not make the same mistake again"、つまり mistake と訳されているからです。evil は「悪魔、邪悪」も意味します。しかも主語の無い日本語に対し、We という主語がある英訳を見ると、「核保有国は悪魔」との誤解すら与えかねません。ロシアのプーチン大統領はウクライナ侵略を「西側の悪との戦い」と正当化しており「G7 は悪魔とのレッテル貼りの可能性を除去することを総理に提案しました。

同じ内容を松井一実 現広島市長にも事前に説明しご理解を頂きました。松井市長が G7 首脳に碑文の説明をしている映像を見ましたが、後に通訳が「過ち」を mistake と訳していたとお聞きして、感動しました。

国際マレーシア（AKASHA・インドネシアIC共催）会議　参加報告　上沼　美由紀

6月3日から6日まで "The Inaugural Learning Community International Life-Work Conference,2023" が開催されました。会場は世界 14 カ国から会議参加者 185 人（開会式は 250 人）が集うにふさわしい格式あるアーマダホテル。参加者の半数以上がマレーシア在住の中国系マレーシア人で、主たる使用言語は英語と中国語。会議は AKASHA の創始者であるナンドール・リム氏を中心にした AKASHA スタッフとインドネシア IC チームのサポートを得て進められました。

開会式はコロナ禍で3年間延期になった会の開催を待ちわびた主催者たちの喜びと感謝の言葉で始まり、各国・地域のお祝いの言葉とプレゼント、歓迎のパフォーマンスなど祝賀会ムードであふれました。

会議のフォーマットはナンドール氏が師と仰ぐリュウ・レンジョウ氏（元台湾 IofC 会長）が長年取り組んでいる Family Workshop を基盤とし、ナンドール氏が真摯に指導を続ける AKASHA のメンバーと共に積み重ねてきたものです。

参加者写真

朝、IC らしい Quiet Time でスタートしたシェアリングを主とした活動は夜 10 時まで続きました。私が驚いたのは当初からステージにあがることが予定されていたパネリストやゲスト、国際 IC 長老メンバーにとどまらず、呼びかけに応じた一般参加者が次々と登壇し、マイクを通じて会場で自身のシェアリングを行っていたことです。それぞれの立場や境遇は複雑で、もちろん他者とは異なっています。けれど、家族や自身との和解、それまでの苦しみや流された涙を全体で共有することができました。発表者が英語で発言すれば、通訳ボランティアがすぐに舞台横のマイクに向かい中国語で通訳を開始。中国語、インドネシア語であれば、それに対応できるスタッフが入れ代わり立ち代わり通訳を行い、今回の会議のサブタイトルである～ I' m Not Going Through All This Alone ～を体現するような会場は、常に暖かい一体感に包まれていました。ただ、正直に申しますと、APYC のグループシェアリングの経験しかない私はその雰囲気に圧倒されてしまい、何度か会場から廊下に出て自身を整えてからまた戻る、という技を生み出し、最後まで参加することができました。

会議開催中、バイキング形式の食事時間は参加者と自由に会話ができる大変に貴重な時間でした。たまたま同じテーブルに座った、国外に出るのも国際会議に参加するのも今回が初めてだという中国からの参加者の方に「緊張はしていませんか。」と尋ねたところ、「今までに自国で参加した会議と同じ形式なので安心してシェアリングができます。」という答えが戻ってきました。しばらく話して、彼が南京から来た方ということがわかり「戦時中日本人が行ったことを謝罪します。」とお伝えしたところ、「日本 IC の兼松惠さんが中国にいらした際、全体の前で謝罪をしてくれた。ここであなたからも謝罪を聞けたことが嬉しい。」と言ってくださいました。

右が筆者上沼氏

マレーシア IC と AKASHA との確執については、自分が経緯に関する知識を持たないことを告げたうえで、ナンドール氏に率直にお聞きしました。その中で、彼が国際 IC の力も借りてこの問題の解決に努力を続け、マレーシア IC と面談を行う予定があることも伝えていただきました。自分たちの足もとの平和が世界平和につながるのですね、とお答えしましたが、それが一番難しいことはお互いに承知の上の言葉でした。

最後になりましたが、この貴重な場に私を参加させてくださいました国際 IC 日本協会の皆様に心から感謝申し上げます。

私の人生と仲間たち　副会長・専務理事　足立 憲昭

私が、走友会に参加したのは 34 歳の時でした。それまでは、一人でジョギングして、市民マラソン大会に参加していました。

千葉市天台の「スポーツセンター」を拠点にしている走る仲間。昨年秋に 40 周年記念を行いました。過去のベスト記録は、ハーフマラソン（21.0975km）1 時間 32 分（1 k m 4 分 12 秒ペース）。この頃は、月間 320 k m（10 月走り込み、1 日 10.3km）でした。そして、71 歳になった今年の記録は、青葉の森リレーマラソンです。

9 人でフルマラソン（42.195 k m）を走りました。私は、1 周 2 k m を 2 回走りましたが、1 k m 5 分 50 秒です。「老いは足腰から」と言いますが、仲間たちの足を引っ張る形でした。走友会の中での私の目標は、90 歳の A 先生（元高校教師）、85 歳の T さん（元東芝）、76 歳の N さん（会長）で、3 人とも現役ランナーです。走友会の良さは、会社生活で辛いとき（特に中間管理職のとき）に、一緒に走りながら先輩たちからアドバイスをもらえたことです。そして、長距離は「練習量が結果に表れる」ことです。これまで、マラソン大会の参加は、280 回ほどですが、私はフルマラソンが苦手で 28 回、得意なハーフマラソンは 150 回ほど参加しました。

70 歳になった昨年から、5～6 年遠ざかっていたマラソン大会に復帰するためのトレーニングを開始しました。マラソン練習を始めると、お腹周りの贅肉が少なくなって、スタイルが良くなります。しかし、シニアのマラソンについて、大切なことは「決して早く走ろう（記録を狙う）と思わないこと」です。そして走るときには、いつも自分の身体（特に、太腿、脹脛、足首）に

青葉の森リレー（2023年）

サンスポハーフ（1999年）

気を配りながら、少しでも違和感があったら、「勇気を持って休むこと」です、決して無理はしないことです。65 歳を超えて怪我をすると慢性になってしまいます。練習は、足りない程度が良く、筋肉を鍛えるより、筋肉を柔らかくするストレッチに重点をおくことが大切です。

私が、国際 IC 日本協会に出会ったのが 32 歳のとき、兵庫県の住吉研修所（住友 G）での会議参加です。多くの大先輩たちが活躍されていました。その頃、同時に「ちば天台走友会」に参加して、走り始めました。仲間も多く、小型バスで「山梨県一宮の桃マラソン」に出かけました。行きは、バスのなかでクイズをやったりしました。マラソンのあとは、温泉に入って美味しい食事でした。帰りのバスは、カラオケ大会です。歌の上手な人が多くにぎやかでした。

私はこれからも「ゆっくり、ゆったり、楽しく」走りながら、元日走り初め、花見の会、暑気払い紅葉の会で、ワイワイ、ガヤガヤ語り合いたいと思っています。

第19回東北アジア青少年フォーラムのご案内　理事　成　豪哲

今年も早いもので 1 年のおよそ半分がすぎて、日本全国が梅雨入りのなか蒸し暑い日々が続いておりますが、当協会会員の皆さまはいかがお過ごしでしょうか。

さて、今年も 8 月 21 日（月）から 8 月 26 日（土）までの 6 日間にわたって、MRA/IC 韓国本部が主催し、韓国女性家族部が後援する第 19 回東北アジア青少年フォーラムが開催されますので、ご案内申し上げます。

本フォーラムは、新型コロナウイルスの世界的流行により、ここ数年はオンラインにより開催されましたが、今年度は 4 年ぶりに韓国にてオンサイトで開催されることとなります。

当協会といたしましても、本フォーラムの三年ぶりのオンサイトでの開催に向けて最大限の協力・協賛をしていく所存であり、藤田幸久会長をはじめとする理事が本フォーラム開会式に出席する予定です。今年度の本フォーラムの特色としては、「世界の変化と持続可能な東北アジアの発展」というテーマは勿論のこと、オンサイトで初めて英語でのコミュニケーションを取るところにありますが、会員の皆様におかれましては、是非、周囲の大学生・大学院生に本フォーラムへの参加に向けてお誘いくださるようご協力のほど宜しくお願いします。

記

1．開催日程：2023 年 8 月 21 日（月）～8 月 26 日（土）
2．会場：韓国ソウル市「国際青少年センター」
3．テーマ：「世界の変化と持続可能な東北アジアの発展」
4．募集人員：日本から 20 名（大学生及び大学院生）、韓国、中国からも 20 名ずつ参加
5．プログラム内容：開会式、主題講演、国別発表、分科会形式での討論・発表、レクリエーション、韓国の歴史・文化探訪、共同宣言文作成・発表
6．費用：参加者負担＝往復航空運賃、個人保険料
　　主催者負担＝現地滞在費
　　（宿泊費、食事代、交通費など）

※小テーマから 1 つを選択して英語での小論文を提出していただきます。
※詳細は、当協会ホームページに掲載されております「第 19 回東北アジア青少年フォーラム計画書」をご参照ください。

国際フォーラムと今後の協会の在り方について　理事　佐々木　淳

理想を追い求め語り合うことで生じてしまう影響、理想と現実について、国際フォーラムを通して、考えてみます。

本年の国際フォーラムについては、現在、内容は鋭意企画中ですが、方向性としては、更に内容を絞り込み、「身の丈に合った」形に縮小を図りたいと考えています。

これまで、国際フォーラムの開催にあたっては、実行委員会を結成し、各位の夢や理想を語り合い、それを実現する、という方向性で進めてきたと思います。しかし、これはかえって、協会の中に軋轢を生み、争いごとの絶えないイベントに、結果的になってしまっておりました。なぜそうなってしまうのか、少し冷静に考えてみましょう。理想を語るのは大いに結構ですが、それを実現しようとするとき、全員の理想が 100% 適うはずなど、ありえないのです。そのために「話し合い」をしているつもりですが、結局、話し合いでは、誰かが折れたり、譲ったり、声の大きい人の意見が通りがちです。まずここに、一つの争いの種が生まれます。

そして、ある程度まとまったと思われる「理想」の形を実現しようと思った時、現実との壁にぶち当たります。実現するには、膨大な資料作成や翻訳が必要であったり、大きな予算が必要であったり。じゃあその膨大な役割分担をどうするのだ、という

ときに、特定の人に負担が偏ってしまい、生活や本業を犠牲にするような過大な役割を背負う、ということが発生します。残念ながら、このようにして、「指を指しあう」ような、決して理想的でない方法に陥ってしまうのが、国際フォーラムのみならず、IC の中には数多く散見されると思っています。また、組織としての制度も、特に国際フォーラムに関しては、定款などの中に、ある程度の枠組みが決められており、柔軟に、各位の理想を実現できる場にはなっていないのが現状です。そこで、国際フォーラムは、一旦ここで膝をつき、国際 IC 日本協会の在り方と併せ、その内容、意味合いを考え直したいと思っています。このようなことから、「国際フォーラム」については、定款の定めにある範囲で、最低限実施するに留め、しかしながらその時間は、参加者の皆さんにとって、最大限の意味合いを引き出せるものとしていきます。

さて、国際フォーラムをいったん縮小することで、皆さんの「理想」を語り、実現しようとする場が一つ減ってしまいます。その新たな部分を、別途検討したいと思っています。「話し合い」ではない方法で。皆さんの「理想」とする本質的な部分はどこにあるのか、国際 IC 日本協会にとって、本当に大切なものは何なのか、様々な分析手法を活用して見ていきます。ただし、分析結果というものは、何らかの答えではありません。ある「ヒント」を示してくれるにすぎません。分析結果を見て、最終的にどうするのかを決めるのは私たち、国際 IC 日本協会に関係する一人一人の意志です。

そこで、皆さんにお願いしたいのは、この分析の第一歩として、皆さんに、それぞれ静かな時間を持っていただき、手紙を書いて頂きたいのです。手紙を書く先は、「前略　国際IC日本協会様」です。IC に対する理想を、手紙にしたためて欲しいのです。ご自身が謝りたいこと、協会の姿勢や在り方として、世間に謝らなくてはならないこと、こうあって欲しい、こうあるべきという部分、変わってほしい部分、絶対に変わってほしくない部分、はたまた、「何も変わらなくていい、今のまま理想を貫いて」などなど。長文になって構いません。長文はむしろ歓迎します。ただ、手書きでなく、メール本文や添付ファイルで頂けると助かります。

これによって、皆さんの「手紙」をデータ化して、言葉を分析にかけます。それを見て、国際 IC 日本協会の本質を見出し、磨き出す作業をしていきたいと考えます。

具体的に、どのように手紙を集めるか、などは、別途詳細検討の上、皆様にご連絡します。どうぞ皆様、ご協力よろしくお願いします。

心、古教を照らす　名誉会長　矢野　弘典（論語塾講師）

このたびは、ご一緒に中国の古典を勉強するという貴重な機会を頂き、まことに有り難うございました。

世界には、数多くのハードとソフトの文化遺産があります。古い遺跡を訪れてみると、祖先が築いたものの大きさに圧倒されます。しかし、人工の建造物はいつかは消えていくものです。

それに比べて、ソフトの知的遺産、とりわけ思想、哲学、道徳、芸術の産物、さらには人々の営みを伝える歴史は、人類の知恵と汗の結晶です。単なる過去の遺物ではなく、古典という形で永遠の命を保ち、悩み求める者に今も親しく語りかけ、課題解決への道標を示しています。

ＩＣ論語塾では、『論語』と『貞観政要』を取り上げました。理由は、この二書は互いに関係が深く、前者が人としてのあり方の基本を説き、後者はそのリーダー実践論の極みだからです。両書の間には、千年の時が横たわっています。それからさらに千四百年を経た今、味わってみて古くさくないどころか、新鮮な感動とともに得がたい教訓を得ることができるのは、まさに驚くほかありません。

「古教心を照らし、心古教を照らす」という、鎌倉の虎関禅師の名言があります。単に教養として古典に接するのではなく、古典と自分の日々を照らし合わせて見ること。とりわけ、自分の思いや経験を古典にぶつけることの重要さを語っています。古典の解釈は、自分流で良いし、そうあるべきだと私は思います。　権威ある学者の解説は、難しい語句の意味や出来事の背景を知るための参考にすれば十分なのです。

私自身は、数年前に家内とともにギリシャ旅行をして以来、孔子と同じ時代に生きた古代ギリシャの先人たちに興味を持ち、もっと知りたいと思い始めました。道は遠く、80歳代の楽しみにゆっくりやる積もりです。

どうぞ皆さまも、自分の古典を見つけて座右の書にして下さい。

※約１年９か月16回にわたり開催されました「論語塾」が、本年６月をもって終了しました。講師をお引受け頂いた矢野名誉会長及び熱心な参加者の方々からご感想を頂きました。

■日向　裕一

矢野弘典先生（名誉会長）主宰の論語塾が最終回となりました。私は、これまでに学んだことを実践できるように努力したいと思います。論語の一節に「之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は、之を楽しむ者に如かず」があります。私は、矢野弘典先生（名誉会長）主宰の論語塾を通じて経験と体験の心の言葉を忘れずに人生を楽しく学び、楽しく生きて歩みたいと強く感じました。矢野弘典先生(名誉会長)の言葉は、私にとって人生の道しるべです。まだまだ私は、論語に関しても初心者でありますが、私自身が決めた詩人としての人生を継続します。そして、私も矢野弘典先生(名誉会長)に日々感謝して人生を歩んでいきます。

■村田　順子

論語講座から貞観政要まで本当にありがとうございました。

国際 IC の精神のもと、皆さまの温かさを感じました。しかしながら想像してみて下さい。大学の講堂で一般向け講義をするのに、対象者が同じ大学の先生や、専門家、いろいろな方たちに混ざって幼稚園生（わたくしです）まで入った状態でした。そういう意味でも、ご準備が大変だったと思います。

内容はもちろん、資料の分かり易さもありましたが、何より、具体的な経験談をお聞きすることができ、一生の宝物となりました。とはいえ、まだまだ論語の入口にも立っておりません。まだまだ一人では古典の森で迷子になりそうです。できうれば「論語講座」の存続をお願いいたします。

■高見　龍也

今回は「貞観政要」を６回にわたって講義していただきました。「貞観政要」につきましては、以前 NHK のテレビ番組で解説を聞いたものの、今一つ理解できず、興味も湧きませんでした。しかし、今回もまた矢野名誉会長のご自身の実社会での経験や趣味を通しての体験談を交えて話してくださる解釈を聞くと、予習で該当箇所を読んでいたものの「ああ、そうか。そういう意味だったのか」と理解が深まりました。それにしても太宗皇帝の器量の大きさには敬服しました。「貞観政要」が世界の名著の一つと呼ばれ、徳川家康らの統治者に愛読された理由も理解できました。開講してくださった矢野名誉会長、事務局及びスタッフの皆様に心より御礼申し上げます。

■中田　幸子

MRA 誕生とも合致するモラルさえ心得ていれば道を踏み外すことはありません。折に触れ教えられた物事が形を変え 2500 年の間に人の心に響いた「千古の名言」として受け止める機会となりました。同時代の４聖人、キリスト、釈迦、ソクラテスとは異なり庶民のなかで教育者に徹した孔子は弟子から私意、執着、頑固、自我がないと言われます。「古えの学者は己の為にし、今の学者は人の為にす」昔は修行のために学問に励んだが今どきの者は人に学問を誇示するために学問をしており修行になっていない。

昨今、ジェンダーギャップに関し時代に取り残された考えに気づくことなく恥ずかしい答弁を行う事案に多く出会います。私は恕(じょ)、思いやりを持ち恥ずかしくなく行動したいと思っています。

■山﨑　克雄

論語に関しては、高校時代に漢文の時間があり、なじみがありましたが、恥ずかしながらこの年まで、貞観政要に関しては無知でありました。太宗と名臣との対話から磨き上げた図書は新鮮でした。政治に携わることは過去にもなく、未来にもありませんが、一国民として、政治に関心を持ち、諫言を受け入れる政党を支持していきたいと思います。会社務めの時は古河市兵衛の「運鈍根」の精神、大学教員になってからは福澤諭吉の『学問のすすめ』を行動指針にしてまいりました。

これからは中国の古典を読みなおし、常に「温故知新」で残された時間を過ごしたいと存じます。矢野弘典名誉会長並びに IC 協会で運営にあたられた皆様に改めて感謝いたします。

ソウル通信（第1回）　岡本　あんな

私は９歳の時（2004 年）に相馬雪香さんと出会ってから、今日に至るまでＩＣの活動に参加しています。現在は韓国に住んでいるため、ＩＣには世界道徳再武装（ＭＲＡ／ＩＣ）韓国本部へのサポートという形で関わっています。今回は、私とＩＣの関わりについて簡単にまとめたいと思います。

元々は、帰国子女の母がＩＣの理念に共感したことがＩＣの活動に参加するようになったきっかけです。当時 2010 年頃、韓流ブームと李明博（イ・ミョンバク）元大統領の竹島訪問などで、学校の友人たちの韓国に対するイメージは大きく揺らいでいましたが、私はＩＣの活動を通じて韓国を親しみやすく感じていました。特に、日本協会の理事である成さんと、学校訪問プログラムに参加するなど日本で何度も活動されたヒジンさんには、私が小学生の頃からよく遊んでもらいました。ニュース報道で知る「韓国」と、自分が直接関わっている「韓国」に違いを感じたことで、日韓関係に漠然と問題意識を持つようになりました。高校時代には朝鮮学校を訪問し、同い年の女の子と対話の時間を持ちました。ＩＣでの Sharing の経験を生かして、何でも話せるような関係性の構築に努めました。彼女からの「慰安婦問題についてどう習った？」という問いかけは、その後、私を韓国留学に導くことになります。

大学生のときには計３回、韓国ＭＲＡ／ＩＣが主催する「東北アジア青少年フォーラム」（日中韓学生フォーラム）に参加して、日中韓のそれぞれの歴史認識が異なることを知りました。その一方で、日本の文化コンテンツについて、中国、韓国の学生たちが大変よく知っていることは大きな気づきでした。例えば、フォーラムで出会った友人が東京を訪れる度、私は地元の鎌倉を案内したのですが、人気バスケットボール漫画「スラムダンク」の聖地として有名な江ノ電の「鎌倉高校前駅」の踏切前に必ず連れて行ってほしいと言われました。

文化を共有しているということは、その国の考え方を理解する手段・方法を持っているということです。日本のアニメや実写映画を見て日本語を覚えたという中国と韓国の学生たちに多く出会いました。私が知らない日本の魅力を熱弁する彼らの姿を見て、日本の文化コンテンツがひとつの言語として中国、韓国では広く受け入れられているということに興味を持ちました。

歴史認識に違いがあっても、文化の面では日本の文化コンテンツを媒介として日中韓の学生たちは共感している。この現象を解明したいと成均館大学の大学院（修士課程）に進学しました。成均館大学は 1398 年創立の、600 年以上の歴史を誇る大学で、日本では韓国ドラマ「成均館スキャンダル」でご存じの方も多いのではないかと思います。

大学院は昨年８月に卒業し、現在は日系の経済メディア記者として主に韓国のスタートアップ業界を追って記事を書いています。韓国ＭＲＡ／ＩＣのサポートも行っており、今年の日中韓学生フォーラムでも、微力ながら日中韓の学生たちの対話のお手伝いをさせていただこうと思っています。次回は、８月に行われるフォーラムについて現地からリポートをお届けしたいと思っています。よろしくお願いいたします。

※韓国ソウル市在住の岡本あんなさんに連載寄稿をお願いしました。ソウルで感じたこと、考えたこと等、これから連載で掲載いたします。

チーム・ミーティング　中嶋　良樹

コロナ禍のもと、ZOOM により行ってきたチーム・ミーティングを、3 年ぶりに行動制限が解かれたことを機に、より良い会を目指し、新たに仕切り直して対面で開催する予定です。

毎月土曜日に、ICオフィスにて行い、遠方会員の方々のために、ZOOM併用での開催とします。会員はどなたでも参加できます。

内容は、近況報告や、各自の「静かな時間」で得た思いを分かち合い、テーマがあれば意見交換をします。意見の違いを認め合い、相手の間違いと思えることも否定でなく、率直に指摘と提言を話し合える関係でありたいと思っています。

私自身、地元のボランティア活動での人間関係の悩みを、チーム・ミーティングの友人に相談したことで、救われた事がありました。

筆者　中嶋氏

メンバーの一人、故中島信子さんは「多様な考えの人とのお付き合いを通じて学び合い、良い所は、見習おうとすることは、とても良いことでＩＣ的な考えに押し潰されない雰囲気にしたい」と仰っていました。

参加して下さる皆さまと、お互いの理解を深め、信頼関係を構築し、ＩＣの精神に基づくチームづくりを目標にしたいと考えています。是非、ご参加をお待ちしています。

次回チームミーティングは７月２２日です。

事務局からのお知らせ

今号では、６月初めにマレーシアで開催された国際会議に出席された上沼美由紀さんに、会議の模様をご寄稿頂きました。猛威を振るった新型コロナもやっと一段落し、今年は対面での国内外の会議が復活する年となりそうです。７月にはコーの国際会議、８月には韓国ソウルで東北アジア青少年フォーラムが、それぞれオンサイトで開催されます。

2021 年９月に始まり、途中休憩期間を挟んで足掛け１年９か月に亘り計 16 回開催されました「IC 交流会　論語塾」が、６月 11 日をもって終了しました。この間、講師の矢野名誉会長からは、毎回ご自身のビジネス体験に裏打ちされた深みのある講話を頂きました。熱心に聴講された皆様、有難うございました。終了にあたり、矢野名誉会長と参加者の方々からご寄稿を頂きました。ご一読ください。

「論語塾」に限らず、皆で学び合うという姿勢をこれからも大切にして行きたいと思います。